



リステラス星圏史略
古資料ファイル
5-X-1-1-2



『未完史』
第1部 第1章
「ほんの発端」
2. ヒーロー・会田正行

(1982～1983)
(旧題：『俺と好』)

霧樹里守 is 土岐真扉
as
遠野真谷人

”俺と好” 1

第1章 ほんの発端（ほったん）

2. ヒーロー・会田正行

遠野真谷人

(1)

.....いてっ☆☆

頭痛。

最悪。

二日酔いの朝。

うるさいと思ったら、さっきから誰かがドアを叩いている。

思いっきり威勢よく拍子をとって

ダン、ダンダンダン、

ドン ダン！

.....ドア？

俺ン家（ち）は、ふすまで...

「起っきろオ〜〜 朝だぞオ。朝〜〜!!」

「っるせえぞユミ！ あんだよンの言葉あっ」

耳もとで怒鳴るバカが一人。

そっかここは好（こう）の部屋だ。

「あっさだぞォ、あさァ！ オキロなんだも〜〜ん！」

可愛い声してつっぱらかっているのはユミちゃん♪

好の妹君。

「うわあいユミちゃん勘弁!! 俺きょう休むわ、頭いたい！」

まだ醒めきらない頭で俺は悲鳴をあげる。

ちょっと乱打の音はやんだが、すぐ、

「あさァ!!」

ドン、ドンダンドン...

「お兄ちゃん達！ サボるなんて云う前に自分の出席率カンガエなさァい！ 落第したって知らないんだぞォ〜〜。」

.....シビアなことをおっしゃる。

「あんの奴（やつ）。」

好がだっとベッドからとびおりる。

「ユミ!! いい加減にしねェと！」

キミの大声もいい加減にして欲しい。

「怒ったって怖くなァいヨ。ちゃんと起きてね♪」

歌うようなはしゃぎ声と、パタパタと階段をおりる足音。

「ヤロ、だんだん生意気になりやがんな。」

そう云う好はゆンベの酒がこたえた様子もない。

いたって元気に不機嫌に着替えはじめる。

「…………ウワバミめ☆」

俺はうめきながら、ようよう体を起こした。

アセドアルデヒドにならない酒を発明した化学者にノーベル賞をあげたい…そう云ったのは確か新井素子だった。ああ、実感。

一学期もそろそろ終わりに近い朝。

期末もあけたことだしねえ家庭科の宿題いっしょにやろうヨ、ということで昨夜はユミちゃんのところにかしまし娘が二人泊まりに来ていた。

で、五月蠅いのから逃げ出すのが半分、俺がちょっとヤケ酒飲みたい気分だったのが半分で俺と好、学校帰りにどうどう制服着て飲みに行き…

好の"行きつけの店"だとかでゲイ・バーめいた所へ連れて行かれてオソロシイ思いをし…

あれ？

そこから覚えてないなァ。

とにかく好のうちに泊まったらしい。

とりあえずシャワー浴びて適当に着換える。

あ、俺、あんまりしょっちゅう入りびたってるもんで、こっちにもなんやかやと荷物置いてあるのね。

…制服はと云えば着たまんま寝たもんでシワクチャだ。

あ〜あ、ユミちゃんにアイロンかけてもらおう暇、あるかな。

ぽてぽてと階下へ降りて行くとエプロンかけた彼女がいる。

「おはよー、キヨくん。はいお薬。」

頭痛薬と特製「宿酔患者用」レモンジュースが白地に花模様のトレイにのってきちんと用意されて出て来る。

うっ、なんていいコなんだキミはっ！

清（キヨシ）という俺の名前を女の子みたくつつめて呼ぶのはこの兄妹共通のクセだ。

「サンキュ♪ それ、また新しいエプロン？」

白を基調にしたトリコロール（フランス国旗色）。

きりっとした薄茶色のおさげに良く似合う。

「あ、わかる？ そーなの。ゆうべ時間あまったから、ついでに作っちゃった」

ちょこっと赤い舌がのぞく笑顔。

「かあいーよ♪ ところでなんか焦げてない？」

「え?! きゃーんっ!!」

ほんっとに可愛らしい声がキッチンにすっとなで行く。

「や〜ん二人して何してんのよっ」

「ふにゅんっ。だってまりおサカナこわいっっ」

「わるい。ゆみっぺ。あたしゃこーゆーの全然わかんなくってっ☆」

キャアキャアどたとた。

あ…………… また頭痛してきた。

泊まっていたのはあの二人だったのか。

「るせエぞ。なにをギャアギャア。」

ヒゲをそり終えて来た好が騒ぎのなかに首を突っ込んだ。

「キャンっ」

まりちゃんの悲鳴。

「くっちゃんっ。こあいよオ」

例によって例のごとく。

これが我校女子一般の好に対する反応なのだ。

そりゃ、見上げんばかりの長身に物騒きわまりない三白眼。

への字の口して不機嫌の三文字しょって歩いてりゃ、当然のこととは思うけどね。

「杉谷変輩あっちゃ行って下さい。まりが怖がる。」

"くっちゃん" こと新入生随一の変人、楠木女史。つ、つおい。

「ひどおい、女史」

ユミちゃんの抗議の声。

好、こと杉谷好一。

サボリ癖がある他は根っから堅気の高校生の筈のこの俺の、一応親友のくせをして、"喧嘩の杉谷" が通称の、知る人ぞ知る〇市の影番の地位に何故かいる。

一匹狼のレッキとしたアウトロー（はみだしもん）であったりなぞするのだ。

「お兄ィちゃん、またキヨ（清）クンにムチャ飲みさせたんでしょ。」

少々おこげの目立つ朝食の席で食欲のすすまない俺を眺めてユミちゃんがのたまう。

「ダメよー。清クンはお兄ちゃんと違ってフツーの人間なの。飲みすぎると急性アルコール中毒で死んじゃうんだから。」

「ンの位でくたばるほどヤワな奴か」

「お兄ィちゃん！」

世話好きなユミちゃんは看護婦志望の家事万能型主婦デシタ。

...性格的にこれほど似たところがないっていう兄妹も、珍しい。

なんのかんのあってさあ学校へ行きましょうと。

制服はと云えば結局アイロンがまにあわなかったもので、俺、ジーンズはいて。

「ウソだろおい。まだ七時前だぜっ☆」

玄関出てはじめて時計を見て、俺。

「好〜〜、寝なおそうぜっ。一時限目、どうせ音楽……」

「だな。さき行っちまえ、ユミ。」

「やーよ。」

ユミちゃん、しっかり玄関にカギかけて。

「あたし朝練だからこれ以上遅くなれないもん。お兄ィちゃん達、一度寝かせると結局また午前中いっぱいサボっちゃうんだから。」

.....この俺達がいまだに落第せずに済んでいるのは、もしかして、もしかしなくても、ユミちゃんのおかげなのかも知れない。

女の子たちの雑談を聞くとともに聞かされながら、二十分も歩いていると向うの角から二人連れが現れる。

うちの学校の制服。

誰だろう... こんなに朝早く？

考える間にもいちやく好が呼びかけた。

「会田サン。」

おわ〜 こいつが敬語使ってるっ

向うからは女性の声。

「あら。お早うございます磯原さん」

... 磯原 清（いそはら・きよし）俺です。

「あ、おはよ、ゆかり姫」

挨拶してくれたのは我が校のマドンナ、会田（あいだ）ゆかりさん♪

と云って、好の声かけた相手がそれを無視して、俺に先に話しかけた、なんて面白い situation を想定してもらっても困る。

「よお杉谷。めずらしく早いな」

ゆったり親しげに笑うのは生徒会長。兼、俺と同じ剣道部の前主将でもあり、何故か好ととても親しい。会田正行（まさゆき）。

速い話が従兄妹同士のこの二人、同じ姓なのだけれど。

会田家と云えばこの地方きっての名門旧家。

その現在の家長の総領息子である正行氏。

会田先輩は、クォーターの好や国際結婚の見本市みたいな俺とは違って見るからに純粹日本人。

それもかなり古典的な顔だちで、若武者というか野武士というか、よく陽に焼けたスカッとした表情。

太く濃い眉に笑うといかにも涼しげな目もと。

鼻筋とおり... 身長は好と同じほどもある。

制服着てもスラリとひきしまった体格で十分カッコいいけど、やっぱり稽古着か和服姿が一番だね。バシッと決まる。

文武両道、人望厚く、名家の次期頭領として〇市内外の老若男女だれからも慕われている。

好が。

いっそ見事なほどに目上の者に対する尊敬心、てものが欠落しきった"〇市の影番"の好でさえが、この先輩にだけは『さん』をつけてちゃんと話すのだ。

一体どういう成り行きで、これだけ世界の違う二人が親しくつきあう事になったのか.....その過程は俺は知らないけど。

それでも会田先輩が自ずからと持って生まれた迫力と貫禄とが、孤高の一匹狼をも従わせるに足るものであり、と同時に、"喧嘩の杉谷"の方も、ただの力づくのお山の大将では決してない、相手の人となりに十分見合うだけの己れを備えた奴だというのもまた、確かな事だったのだ。

.....な一んちってね。

その、人呼んで〇高の暴れん坊將軍、時代劇風スーパーヒーローが、少しからかうように笑って俺に話しかけた。

「磯原もか。久しぶりに朝稽古に顔を出すのか？」

「え、.....あはは、まあ」

ひたすら寝起きの悪いこの俺が、早朝練習に参加しない故に主将になりそこねた、てのは校内でもちょっと有名な話。

「今日は午前中いっぱい寝てるつもりだったんですけどねー。ユミちゃんに情け容赦もなく叩き起こされてまして。」

「はっは。いかにも磯原らしいな。」

「それではこちらが優実子さんですか？」

折り目正しいのは、ゆかり姫。

視線を向けられた"くっちゃん"こと楠木女史、ネズミ花火のみこんだ猫の顔。

「いっ★ いいえっ。まさかつ!!」

「ユミコはあたしです。お早うございます。会田先輩。」

「.....あら。お早うございます。ごめんなさいね杉谷さん。ユミコさんとお呼びしてもよろしいかしら。

あたくしは会田ゆかりですわ。名前の方で呼んでいただけます？

...お噂はいつも。」

「はい。ゆかり先輩。」

...ゆかり姫、いつも思うけどホントに古式ゆかしい躰（しつけ）をうけてきてる。

これで会田先輩と許婚者（いいなづけ）だ...て噂さえなけりゃなァ。

に、しても、いい眺めじゃ。好みの美少女が二人♪

資料参照：<http://85358.diarynote.jp/201610131536256696/>

[『俺と好』第1部 第1章 ほんの発端（ほったん） 2. ヒーロー・会田正行（あいだ・まさゆき） \(1\)](#)

2016年10月13日 [リステラス星圏史略](#)（創作）

(2)

なんだかんだと七人連れだって学校へ歩いて行く。

「会田先輩はどうしてこんなに早く？」

ゆかり姫が毎朝図書館に寄ってるらしいのは、俺、知ってるけど。

「ああ。僕達は毎日この時間だよ。今年に入ってから放課後の半分はゼミに時間とられてね。生徒会の仕事が遅れがちなんで、他の奴等にもつきあわせて、朝のうちに片付けるようにしてるんだが... おかげで役員連中にえらくウケが悪い。

そろそろリコールかな？」

「また、そんなご冗談を」

ゆかり姫が穏やかに苦笑しかける脇で、

「うわァ大変なんですねえっ」

すっとんきょうなのは楠木女史。そこまで声を張り上げちまうと、既にザートラの母だよ。

...やば。

このコ、どっちかってと無政府主義者じゃなかったっけっ。

女史の隣では相棒のまりちゃん、"憧れの生徒会長" サンの側であがっているのか、ちょっと赤い顔してうつむき加減。

こうしてると結構このコもかわいい。

会田先輩はと言えばかなり嫌味臭い女史の口調も別段気にしない様子で悠然と話を続ける。

「そりゃ高校も四年生ともなればね。

でも僕は行ける範囲で...て事で、あまり受験一本槍に絞っているわけじゃないからなあ。他の連中に比べるとかなり楽してる。」

「あ、俺も来年きっとそのクチだ。」

「いえてる」

俺とユミちゃんが笑いあっていると、一拍おいて、

「おまえ会田サンの "行けるところ" てのがどの程度か解って行ってんのか？」

ニタリ笑う好。

「T大の法科だぜ。」

「ひええっ共通一次!!」

期せずして俺、ユミちゃん、楠木女史の悲鳴が重なったりして。

「よせよ杉谷。あまり皆にバラすな。もしも落ちた時に引っこみがつかなくなっちゃう。」

へー。

好と会田先輩で俺の想像以上に親しいんだ。

学校じゃほとんど一緒のところなんて見かけないのに、いつ志望校とかの立ち入った話する暇があったんだ？

「大丈夫ですわ。正行さんならば絶対でしてよ。」

控え目に、けれどはっきりと意見をのべるのはゆかり姫。

「きゃいん。会長さんすごォい♪♪」

ミーハーまりちゃんひとりで感動している。

有難う、とかそれへは軽く肯いて会田先輩は俺達に矛先を向けた。

「で、おまえ達はどうするんだ3年生？」

まあ一応全員進学として... ゆかりは大体僕と似たようなコースか。温和しく花嫁修業というつもりも、なさそうだからなあ」

「ええ正行さん。まさかあたくしが」

「ま、なにせよ今年で卒業して予備校に行くか、4年生科に進んで受験準備をするかだけは、早目に決めておいた方がいいぞ。」

.....なんか朝からマジな話題.....

日本の高等教育が延長・複線化されて数年たった。

卒業は従来どうり3年次。それまでの授業は受験とは一切関わりなく進められる。

"ゆとりある教育" とやらで幅広い一般知識を身につけさせ、適応力あるゼネラリストを育成しようというそのお題目の通り、女の子の大半や出世の望み薄いホワイトカラー志向はみんなここまでで就職しちまうようになった。

大学へ行くのは金と時間があまりにもかかり過ぎるから。

そのかわり少数の進学希望者はおおかたが母校の4年制科か予備校へ進む。これはもう徹底した受験指導オンリー。それと大学で専攻しようとする学科の予備知識と。

俺は.....たぶんたって素直に4年制科に進むだろうな。そうそう今の実力とかけ離れたところ狙う気ないし、2年も3年も受験勉強にしばらくはまっぴらだ。

高校在学中に遊びすぎたか、どーしても身の程知らずの高望みをしたい、って連中が、高いカネ払って予備校に行くのである。

好は、どうする気かなァ。

「おい。キヨ（清）。」

どつかれた。……なんなんだよ。いちいち呼ぶたびにひとのことその三白眼でにらむなよなっ！

眠くて眠くて...

(なんたってこの俺が朝の7時台に目を覚ましてるなんて、初日の出見るのに徹夜する時ぐらいのものなんだ)

ちょっとポケットとしてる間に会田先輩が何か云ったらしい。

「あ、すみません先輩。なんですか？」

「きのう云ってた話だよ。詳しく教えて欲しいんだ。」

「えー、……きのう俺、先輩に会いましたっけ。」

とたんに先輩、これ以上ないという感じで面白そうに吹き出した。

「磯原おまえ...

もしやとは思ったが本当にゆうべの騒ぎ忘れてるのか、杉谷？」

「多分。朝起きた時もケロツとしてたし。」

おーおー好。おまえが人をいたぶる時以外に笑うのをはじめて見たよっ

...ゆんべ？

例の店の...

帰り道かどこかで、会ったんだろうか...？

とにかく。

会田先輩が何を尋きたいのかは解る。

昨夜の俺の、好のおかげでどこかよそへねじまげられちゃったけれども、ヤケ酒を飲みたいと思いたった、そもその理由。

俺の得意科目ってのは社会科系統と現国なわけ。

根っからの文系人間。

英語は... 会話はなんとかなるんだけどテストにがて。

で、その社会科。国史の自由課題。

「夏休みの終わりに県のコンクールがあるでしょう、論文発表の。俺はまあ好きだし、どうせなら金賞もらうくらいのつもりでやってやれとか思って、期末の前あたりから構想ねってたんですよ。それできのう資料借りに図書館行ったわけです」

「何処の？」

「学校の。ほら、奥の棚のところに各科目の数十年前からの教科書がストックしてあるでしょう。あれの国史分野のを、未だ『日本史』って呼ばれてたっていう頃からザラッと貸し出して欲しかったんですよ。それが...」

順を追って話すうちにまただんだん腹が立ってきた。

学校の図書館司書は停年まちかい存在感の薄い先生で、ただひたすら本を愛して一生を静かにおくる、といったタイプだ。

読書好きの生徒のためにならジャンルを問わずどんな本でも購入してくれるおかげで、俺なんてどれだけ本代がたすかったか知れない。

それに俺がちょこちょこ書きためている小説のたぐいをいつも熱心に読んでは批評してくれる。

文芸部の部誌を気持ちよく置かせてくれているのも彼だし...

はっきり云って俺はあの先生とはかなり個人的に親しかったし、信頼もしていた。

で、軽い気持ちである特別貸し出しの本を読ませてくれと云いに行き。

あっさり断られた。

「その理由ってのがどうもはっきりしない。というより、まるで説明してもらえなかったんですよ。」

「まあ……」

同じく図書館常連メンバーのひとりであるゆかり姫が困惑した表情。

ね。やっぱきみもおかしいと思うだろ、渡辺先生がそんなまねをするなんて。

「でも奥のケースの鍵って、ちゃんと断りさえすりゃ誰でも借りられる筈じゃないでしたっけ。」

これも入学早々『図書館のヌシ』を自称している楠木女史が、それでもピンと来ないらしい顔で口をはさむ。

「……うん。そりゃ、1度に20数冊、てのは前例がないだろうと思うけど。それなら俺としては何度かに分けて借りたって構やしなかったのに、それを云いだす暇もなく『駄目だ』の一言なんだ。」

それにもっと妙なのは、そう言った時の先生の顔がひどく青くて……」

「そんなにひどく怒らせちゃったの？」

驚いた様子の、これはユミちゃん。

「って云うより動揺してた。なんて一か、そう、まるでなにか怯えてるような様子で。」

「怯える？」

会田先輩、眉しかめる。

「それで20数冊も借り出して、何を調べようというつもりだったんだ？」

「教科書の歴史……っていうか、"歴史の歴史"ですか。題はまだ決めてなかったんですけど、とにかく近・現代史にマトを絞って、それぞれの事件に対する改訂版ごとの教科書での取り扱いがたの変化、ってところを追っかけてみたいんですよね。」

「とりわけて、例の、……年の全面改定の前後に焦点をあてて、ですか？
……なかなか興味深そうなテーマですわね。」

そーそー。さっすが学年一の才媛ゆかり姫、すぐに話がわかる。

「何なんですか？ その、全面改定とかゆーのって」

「あ、あたしそれ知ってる。清クンたら去年からこだわってるんだもん、あのね。」

門前の小僧ならぬなんとやらの、ユミちゃんの説明を補足すればこうなる。

『そして19XX年、国民多数の要望に応え、文部省は従来使用されていた中学・高等学校用社会科教科書における不適正かつ誤りの多かった記述を全面的に改めた。』

昨年の補習の文化史のなかの、教育史通史用テキストの補助教材のひとつみ。

「へー。ンなもんにせっせとこだあってンですか。ヒマとゆーか、おたくもそーと一根がクラいねっ」

楠木女史が言う。おたくというのは俺のことなんでしょう、たぶん。

「失礼ですけど目上の方に対する御言葉使いとして適当なものだとは思えませんわね。」

ゆかり姫、言い回しがややこしくなるのは気を悪くした時。

女史の方はそれに感づいた様子もなく、

「んでそのどこがナベちゃん（渡辺センセ）とケンカしてまでやりたいほど面白いんです？」

無視されたゆかり姫のきれいな眉がピクリとひきつる。

俺はうわー、とか思いながら、

「考えてもみなよ。あの、黒いものを白と言い張ってでも自分の間違いなんて存在も認めようとしないおかみ（政府）の、いわば直属部隊なんだぜ、教育省ってのは。

それがいくら国民多数とやらの署名運動でもなんでもあったか知らないけど、天下の学校教科書を全面的に書き換えようって言うんだ。

それ以前にどんなことが書いてあって、どう『不適正』だったのか、書き換えられた前と後のどっちがどれだけ実際の出来事に近いものなのか、そこんところに興味を抱かないようならそりゃあ嘘ですぜっ」

あせるのでやたら早口になる。

「そんなものかなァ」

不得要領なユミちゃんの顔。

「らしーねえ。」

なにやらほくそ笑んだ表情の楠木女史。

資料参照：<http://85358.diarynote.jp/201610131709503653/>

[\(2\)](#)

2016年10月13日 [リステラス星圏史略](#) [\(創作\)](#) [コメント \(1\)](#)

「ですけど "全面改訂" の際には第2次大戦後占領期の教育における混乱と誤り及び不備な点を廃し、我国元来の史観にのっとって再編纂が行われた、とあの授業の折に先生もおっしゃっておられた事ですし、史実に近いという点では改正された現行のものの方が優れていると考えるのが当然の事ではありませんの？」

「あま〜い。と思いますねエ」

"くっちゃん" はあくまでも姫とは逆意見を主張するみたいだった。

「だァたい物価は上がるしぜーきは上がるし、うちの店なんて、も、潰れる寸前ですよォ。それってゆーのも今の政治がロクなコトしてないからっしょ。んでチンタラチンタラ物が値上がり続けてんのァはるか昔からの事なんだから、いつの時代にも政治なんてのはロクなもんじゃあなかったと。

その政治屋連中が巢喰ってる国会で教育省の予算決めんでしょ。教育省の御役人サマも議員サンと親戚さん。って事はですよ、ど一せロクなコトをした試しの無い連中ばっかが集まって人を教える本を作ってる。

その連中が、正直にありのままのこと、書かせると思えますかね。冗談じゃありませんよ、自分達のやったドジも悪事もみんなバレちゃうじゃない。

...これはやっぱ、ひたすら美化正当化の一手デスよ。」

.....たら。

「うがったものの見方をなさいますのね。」

ゆかり姫、底知れず空丁寧な口調で。

「失礼ですけども改訂が『国民多数の要望を得て』行なわれたものだという事実を忘れて頂きたくはないものですわ。」

「"国民の意志" でのフツ一国会ってシロモンに代弁されちゃうんですよねー。」

「何がおっしゃりたいのかしら」

「せーじ屋なんでものほど一般国民とかけはなれた価値観もってるヤツもそういない、国会てのはロクなコトをやらない最たる連中の寄せ集まりだっていう事でしょうね。」

.....こあいよォ、無政府主義者っ！

いったい楠木女史はゆかり姫の父上が現役国会議員だって事を知らないのか、承知の上であえて言ってるのか。俺はあきれて、

「おたくも、い一加減ひねっこびた性格してんねー☆」

とは云え面白いアドレスではある。

しばし全員沈黙で歩き続ける。

「...くっちゃん。」

ようやくゆかり姫が何かしら反論を口にしようとし、いよいよ第2ラウンド突入か、という時だった。

「ふにゆんっ。くっちゃあんっ」

「え、なに、まり。どしたのっ」

ひとり話題について来れず、コンパスの長さからいっても自然遅れがちのまりちゃん。

半泣き声にその熱心な保護者、大慌てである。

「むつかしいお話するから、まり頭イタクなっちゃった。くっちゃんまでワカラナイ事しゃべっちゃ、ヤ。」

...ヤ、つってもね、ロリコン・キラーのまりちゃん。

俺達この続き聞きたがってたんだし、第一"くっちゃん"自身はかなりその気になってしゃべって

...

「ごめん。まり。悪い。もうしない。」

へ？

「ホント？ くっちゃん？」

「ほんとほんと。ねっ、そう云えば川井さんチおととい仔犬生まれたんだよねっ。一匹もらう約束なんだけど、まり、どれがいいっ？」

あれよ。

女史の方であっさり論陣たたんで引退しちゃったもんで、3年きっての才媛v.s.1年きっての大変人、の、この一局はお流れになってしまった。

ゆかり姫の方もよほど拍子抜けした様子で、そこは育ちの良さから、かきたてられた不機嫌を俺たちに方向転換することもできず、黙然。

会田先輩はそれを眺めてやれやれという苦笑顔。

べそかきまりちゃんを慰めるのにユミちゃんまでもが一步離れた所へ下がって行ってしまったりするもので、俺としても当然、この成りゆきは面白くなかった。

ただ好だけがあいも変わらぬ薄ら笑いを浮かべて歩き続け、誰にともなくボソッと云う。

「...たしか文化史の補習ってな壺金（イチガネ）の管轄だったよな。」

「、だよ。なんで、」

「渡辺に頼む時、そばにヤツァ居なかったか？」

「.....ああ。そう云えば.....」

壺金センセというのは教育法改正の前後だか直後だかに転任して来た歴史科の教師で、社会科全般の教科主任でもある。

「あの時もあのやたら嫌ったらしい眼でこっちのことねめつけて…」

「ああ。それでか。」

たな、と最後まで俺に云わせず、後ひきついだ会田先輩ひとりで納得。

ずるい。

「なんですか？ 正行さん」

「いや。なんでもない。……磯原。」

「はい？」

「その論文は多少のリスクを侵してでも調べる値打ちのあるものか？ 危険があるからやめろとおれが言ったら、大人しく発表を控えてもいい程度のものか？」

……リスク？ 危険？

「こうなりゃこっちも意地ですもん、たとえ資料が手に入らなかったとしたって何とか調べあげてコンクールに出しますよ。このテーマでね。」

「ん、よし。わかった。」

会田先輩、もし時代劇だったらポンと胸のひとつも叩いてくれそうな、惚れ惚れするよな、イヨッ！ 侠客だねッ!!

「全部そろってるというわけにもいくまいが、会田家の書庫に祖父、父、叔父貴その他の使っていた教科書がそっくり残っている。

ウチはもの持ちのいい一族だから、あと2～3箇所の主な分家に声をかけてみれば大概のものは手に入るだろう。それを使え。

ゆかり。御宅の母上は古い教科書をどうしてある？」

「わっ！ さすが先輩っ！」

俺はもう感動にうち震えたりなんかしちゃったりするもんね。

と、

「てっきり止めるかと。リスクが大き過ぎやしないですかね。」

いつもの通りうっそりと好が水をさす。

「他の奴ならな。ま、磯原にはおまえがついてるし、いざとなればおれもある程度は動ける。」

「大体このバカは危険があるって事をすら未だに理解しちやいねえんだ」

「だからこそその"予備人材"だろう？ かお（存在）を事前に知られちゃうのはまずいかも知れないが、たまにはこんな風に正攻法から入って来る奴が居たっていい。それとも...」

話を続けながら会田先輩、"くすっ"ともつかず、無表情な好の仏頂面を眺めて楽しげに微笑ってみたりする。

「そんなに心配なら指定を解いたっていいんだぞ。おまえなら他に"狼"だって誰だって心当たりはあるんだろう。おれは、ゆかりで、変えようという気はないが。」

「誰がこんな奴を心配～～」

好の口調が心持ち抗議っぽくなる。

不意に名前を出されたゆかり姫は幾分当惑した顔。

「はっは。まあ、なんとかなるだろ。」

"遠山の金さん"の不敵めいた白い歯の笑顔を、横目に見上げながら会話のまるで通じていない俺はわめいた。

「頼むから、ふたりっとも日本語を...」

ひとこと言い終わりもしない、ちょうど、その時。

「っふにゃああああん！

いやァァっ

なにコレなにコレ、くっちゃああああんっっ！！」

時ならぬ。

絹をひき裂くような。

.....俺たちは一斉にうしろを振り返った。

(資料参照：<http://85358.diarynote.jp/201610132052537559/>)

(3) (本日ここまで!) ⇒ (ぱぶーで本にしてくる~☆)

2016年10月13日 [リステラス星圏史略](#) (創作) [コメント\(1\)](#)

(借景資料集)

善野高校通学路。 (2014年7月12日)

<http://85358.diarynote.jp/201407121710427786/>

善野高校通学路。

2014年7月12日 [リステラス星圏史略](#) (創作) [コメント \(1\)](#)



そう思って観ると、
真駒内川なんかモロに、
銀白青（ぎんびやくせい）川...
、（・w・；）ノ

水音も、規模も植生も栗卒！

? (^◇^;)

<http://76519.diarynote.jp/200609282001000000/>

コメント



[霧木里守≡畑楽希有（はたら句きあり）](#)

2014年7月12日17:12

...どこなんだココは...

(・ω・;)(;・ω・)

もしかして、

『ニグルの木の葉』？

...私、じつはもう、死んだあと...？

(͡° ͡° ;)

(続きのご案内)

この続きはこちらでお読み頂けます ♪



<http://p.booklog.jp/book/110579/read>

リステラス星圏史略

古資料ファイル 5-X-1-1-3 『未完史』

第1部 第1章「ほんの発端」

3. 唐突ですがスペースオペラ。

【有料】で～すw

手こずったので【200円】にしました～www

リステラス星圏史略
古資料ファイル
5-X-1-1-2
『未完史』
第1部 第1章
「ほんの発端」
2. ヒーロー・会田正行

<http://p.booklog.jp/book/110390>

著者
霧樹里守 is 土岐真扉
as
遠野真谷人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/110390>

ブックログ本棚へ入れる
<http://booklog.jp/item/3/110390>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）
運営会社：株式会社ブックログ